

紅緑編「滑稽俳句集」を読み解く 18

2010.11.28 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 先日の猛暑が嘘の様に、「明日はぐっと寒くなります」等と天気予報に脅かされ、昼間でも風にマフラーを取られそうな寒さになりました。こんな時は体調を崩される方が多いのですが、会長は大丈夫でいらしゃいますか？

ところで、108年前の貴重な古書、紅緑編「滑稽俳句集」の読破を会長が宣言されてから一年半、まだ「夏の部」ですが、やっと半分近く読み終わった様ですよ。

会長 > 半分ですか。しかし、半分読解したということは、あと半分ですから簡単なことです。私は始めたことは続ける。それだけが取柄。

高橋 > 「初志貫徹」ご立派です。協力は惜しみませんが、でも簡単とは…。多彩な能力をお持ちの会長に、「それだけが取柄」とおっしゃられても…。

それでは、ほぼ半分ということで、本日は趣向を少し変えて、「平成の滑稽句」が目指す方向を交えながらのご解説を戴きたいと思います。少し抽象的なお願いになってしまいました…。

会長は、現代の俳句界に失われている滑稽を取り戻し、「より質の高い平成の滑稽句を後世に残す事」を目標に、「滑稽俳句協会」を立ち上げられましたね。

文芸は本来、自由闊達な精神の賜物だから、「滑稽はこれだ」と決め付けること事態が滑稽ですが、「ふふふ！と軽く共感を持って笑えるもの」、「詩情が漂い哀感が透けるもの」等を「質の高い平成の滑稽句」として「擬人化」や「裏切り」、「誇張」、「言葉遊び」、「日常からの発見」等々を用いて作句をと教えて戴いた様に、私は思っています。

でも最近この「初心」を忘れた様な句を時々見かけます。「ひどい駄洒落」、「独り善がりの発見」、「哀感」どころか「挑戦的で文句ある？って感じのもの」など。

「猥褻」にしても、

蝉殻をぬぎつつあればセミヌード 健

御仏の秘所にも触るる煤払い 前川敏夫

こういう「上質の猥褻」が微笑ましいのではないかと思います。確かに文芸は自由な精神から生まれるものですが、昔に帰るだけでは駄目。上質で独特なものであれば、平成の滑稽俳句協会の意味がないのではないのでしょうか。

自分は出来もしないのに偉そうなことを言って、会長のお言葉をお借りした私のショート・ショート俳句論になってしまいましたが、理想は高く「初心」に帰らなければなりませんね。

会長 > 鋭いご指摘、一番恐れていたご批判です。

確かに高橋さんが「眉を顰める」ような句を、「上質な滑稽」を目指しながらも時々登場させています。何故なら、ここが難しいところで、上質だけを並べても高尚過ぎて、近寄り難いものになってしまう恐れがあるからなのです。

上質でない滑稽や猥褻はわかり易い。初心の方などのこなれていない表現の句も、いずれは少しずつ上質に向かうものと思っております、つまり…、「良貨が悪貨を駆逐する」と睨んでいるわけです。

ううん…、これは弁解でしょうか。しかし、ご指摘、心します。ありがとうございます。

高橋 > なるほど、そういう意図もありだったのですね。理由が分かり、安心しました。それでは、遅ればせながら本題に参りましょう。

今日は「夏の部・動物」、季語は「時鳥」。ほととぎすは、カッコウ目カッコウ科の鳥で、「てっぺんかけたか」と鳴きますね。

郭公顔の出されぬ格子かな 野坡

小僧聞け夜を寝ぬ鳥ぞ時鳥 存義
ほとゝぎす聞や自剃のぼんのくぼ 沾涼

鶯は婆アとなりぬほとゝぎす 子規
明易き夜ぢやものお前ほとゝぎす 漱石
宗匠の顔に嘔吐はけほとゝぎす 紅緑

「老鶯」には「婆ア」ばかりでなく、「爺ィ」だっているでしょうに！子育ては雄だって出来ますよ。例えば産めなくても。（笑）それに、女郎とか小僧とかひどい時代背景ですね。この内の一句を会長に、川柳か、現代風の滑稽句に直して戴きたいですが、まずはご解説くださいね。

会長 > ここは子規と漱石の句について取り上げましょうか。

子規の「鶯は婆アとなりぬ…」の句、「婆ア」とは老鶯のこと、夏鶯です。ホトトギスは託卵の習性がありますね。鶯の子育てにあわせて飛来するわけですが、今頃来てもダメと言ってるわけです。

漱石の「明易き夜ぢやもの…」は、ホトトギスは夜遅く鳴いたり朝早く鳴いたりするので、夜直鳥 の異名があります。この句では夜更しする友人をお前はホトトギスみたいだぞと、からかっているわけです。だから、存義の「小僧聞け…」の句は、小僧に寝ないで働けと言わぬばかり。
さて、現代風に改作して欲しいとのことでしたね。さしずめ、こんなところでしょうか。

コンビニの夜勤は如何ホトトギス
煩惱の窪に躓きホトトギス

高橋 > 有難うございます。流石です。それにしてもホトトギスは面白い鳥ですね。少しずるいけど託卵して子育て放棄したり、夜直したり、髪の毛の薄い人をからかったり。

次の季語は「閑古鳥」です。
ご解説よろしくお願い致します。

かんことりかもなく不可もなくね哉 蕪村

山人は人なりかんことりは鳥なりけり
蕪村
木乃伊(ミイラ)取る人は帰らず閑古鳥 子
規
山中に草鞋は化けて閑古鳥 無事庵

会長 > **蕪村の「かんことり…」**の句、
「不可もなくね」には「可も無く」と「鳴くね」のふ
たつを織り込んで成功しています。「山人は人な
り…」は、山に共生している人と鳥を区別してみせた
のですね。ともに山の生き物と言う前提です。

子規の「木乃伊(ミイラ)取る…」は、「ミイラ取り
がミイラになる」を句にしたのでしょう。子規にはこ
ういう馬鹿馬鹿しい句がありますね。

無事庵の「山中に草鞋…」の句、昔は「化ける」とい
う非科学的なことがマジメに信じられていました。化
けたとすれば一応の解決になりますからね。

高橋 > 成る程、昔の人の解決法は、なかなか面白いですね。
「あっ！化けてる」で全て解決（笑）。

次の季語は「蝙蝠」です。蝙蝠は獣なのか鳥なのか？
科学的にはコウモリ目（翼手類）の哺乳類ですが、非
科学的な俳句やお伽噺では自分に優位な方に付きます
から、面白い解説をお願い出来そうですね。

蝙蝠の化けそこなうて明けにけり 塵外
月一つ蝙蝠二つの蒔繪かな 紅緑

会長 > **「蝙蝠の化けそこなう…」**は、蝙蝠は気味悪い顔をし
ていますから、あれは化け損ないだというわけでき
ね。化けてしまったら怖くない。

「月一つ蝙蝠二つ…」は、蒔絵は漆をかけた器物の表
面に金銀などで絵を描いたりするものですね。月一
つ、蝙蝠二つですから、おそらくは文箱程度の物と思
われます。

高橋 > 次の季語は、「河鹿」、「鶉」、「翡翠」。
一句ずつですので、続けてご解説下さいね。

瀬にふみつけられて河鹿鳴く 子規
見失ふ鵜の出所や鼻の先 蕪村
翡翠やおのれみめよくて魚沈む 子規

かわせみは雄を「翡」、雌を「翠」と言って、夏の季語なのですが、よく名付けたもので、玉のヒスイも同じ漢字ですね。どちらも美しくて素敵です。

会長 > 「瀬にふみつけられて…」は、瀬(かわうそ)は子規が愛した動物で、「瀬祭書屋主人」という俳号もある。寄宿舍の自分の部屋につけた「瀬祭書屋」の名称は、瀬が捕獲した魚を並べ散らかす習癖があり、子規の散らかした書物を魚に見立てたものですね。その瀬が河鹿を踏みつけることはあり得ます。河鹿は陸生の蛙で良い声で鳴きます。食べられる寸前だから哀しくて鳴くのだと子規は考えたのです。

「見失ふ鵜の…」、これは鵜飼の風景ですね。鵜匠が縄をゆるめて鵜を放ちます。鵜は潜ります。見失います。突然、目と鼻の先に浮上したのですね。

「翡翠や…」の句は、かわせみは確かに美しいけれど、魚は「みめよくて」とは言えないから沈んでしまうということでしょう。

高橋 > 本当に楽しいご解説を有難うございました。
これで「夏の部の動物」は終わりです。

次は「夏の部の人事」ですので、ここで、残念ですが、次回にまわさせて戴きますね。

では最後に本日は、滑稽俳句協会会長に、今までにご解説戴いた百八年前の数々の俳句から、お受けになられた当時の句や暮らしのご感想をお願いしたいと思います。
虎造節だとなお嬉しいのですが…。

会長 > ♪伊予の国いい。
かわうそ岸に魚並べええええ。
正岡子規の号となるうう。
里山に郭公つけてホトトギスうううう。
肱川という名の曲り川、大きく舟の迂回して鵜飼はじまればああああ。
丁度時間となりました。
ちょと一息、願いまして またのご縁とお預かりいい。

高橋 > まあ！面白くて素敵な虎造節ですね！
昔、子どもの頃聞いた虎造節にそっくり！
一人で聞くのは勿体ないくらいです。皆様にお聞かせ
出来ないのが本当に残念。何かの折に皆様方にも是非
お聞かせしたいですね。

会長 > それはちょっと…、なんせ、虎造節に夢中になって滑
稽俳句やめてしまう恐れがあるからね。はっはっは。
